

『神戸新聞』「随想」2019年7月29日夕刊

日本の大学・科学はなぜ劣化したのか？

日本の大学・科学が急速に劣化し、世界で存在感を失いつつある。優れた論文や特許数の国別順位で、日本は下落の一途をたどっている。

この劣化は、日本政府による「大学改革」と軌を一にして進んできた。

なぜ、改革するほど劣化するのか。それは改革の方向や手法がまちがっているからだろう。

今、大学では枝葉末節の改革、及び、「改革を進めていまずよ」と文科省にアピールして資金を確保するための会議や事務作業ばかりが膨大になり、肝心の研究のための時間と労力がすり減らされている。角を矯めて牛を殺し、枝を矯めて花を散らせているのだ。

また昨今の大学改革では、「P（計画）↓D（実行）↓C（評価）↓A（改善）」という定型的なサイクルが重視されてきた。これは、一九五〇年代に考案された工場生産管理の手法だ。この時代遅れの管理法が、なぜか二一世紀の日本の大学で金科玉条とされてきた。

研究で決定的に大切なものは、インスピレーションと発見、探究心と獨創性だ。それらは定型的サイクルではなく、天啓の如く舞い降り、心の奥底から湧き上がる。

そこに到達するまでの無限の失敗と試行錯誤に必要なもの

は、すべてを忘れ去るほどの没頭だ。私の如き凡庸な研究者でさえ、食事や睡眠を忘れるのは日常茶飯事だ。大学改革の雑用で研究時間を細切れにされる以前は、靴を履き忘れたまま外出したり、日常会話が耳に入らなくなったこともある。ニュートンが卵とまちがえて時計を茹でたというエピソードも、ほとんどの研究者にとっては「さも、ありなん」だろう。

日本の大学・科学の再生に最も大切なことは、研究者が研究に没頭できる環境を整えることだ。膨大な雑用や型にはまった管理は、獨創的研究の邪魔でしかない。